

## 米国公立小学校～ある総合芸術の試み～

時得紀子（上越教育大学）

'85年から6年間の在米を経て、'91年からは幾度かの渡米を繰り返し、学校訪問を重ねてきた。今日我が国で横断的・総合的な学習が急速に推進されている現状を鑑み、我が国の実践ではあまり類を見ないと思われる試みを紙幅の都合上一校のみ取り上げ、その示唆に富む実践の概要を述べてみたい。

### 総合芸術で一週間の学びを集大成

校長自らが、演劇の博士号を持ち、かつて俳優であったという、ユニークな公立小学校のひとつとして知られる、Wolcotto School(ウォルコット・スクール)では、一週間(米国は完全週5日制)を締めくくる毎週金曜日の午後の2時間を費やして、総合芸術で全学年の交歓会を催している。この学校のポートフォリオ(子どもたちによる学習過程の記録、主に作文など)から、諸教科で培った知識や、日常生活で体験した様々な出来事などを子どもたちが、週末の交歓会や毎日の表現活動という、他者に向けたアウトプットを通して、再び自らの経験や思いを消化吸收して、より具体的に自己にインプットすることができていく過程を読み取ることができる。

次に週末交歓会の様子を事例を挙げながら、シュミレーションしたい。毎回の会の導入では、その週を担当する何人かの児童が全校の前で自作の詩を読み上げ、その詩に異学年の児童が作曲をし、ピアノなどの楽器で演奏する。そして全校(幼～小5)で唱和していく。この恒例の「週替わり即興合唱」に続いては、週毎に異なったヴァリエーションに富む展開が、次に述べるように繰り広げられる。

ある週は社会科で学んだ町の歴史を基に国語の時間に台本を作成、演劇の授業で台詞や演技をマスターしたものが劇として披露された。この劇に取り組んだクラスは移民の子どもたちで多数占められ、英語の正しいアクセントや発声、身体を使った表現を学ぶといった様々な基本の習得も兼ねて

いる。演劇専門である校長自らがこのクラスの指導を担当した。

また別の週には、高学年の男子が流行のラップを一糸乱れぬ群舞で、高学年女子は自作の物語を創作ダンスで披露した。この学校では、地域の数校の小学校を兼任するダンス講師の指導により、基本の備わった、かつ集団の中でも個々の持ち味を生かした、きめ細かい動きの指導がされていた。

我が国の総合的な学習では多彩な表現活動の探求がされながら、「今、なぜ表現なのか」が現場で問われている。幾度となく参観の機会を得た米国のこの試みで、「児童が他者の前で自分の思いを表現することを通して同時に己れの内に学んだ事柄を取り込んでいる(血や肉にしている)」また、「仲間と共に、合唱や舞踊で創りあげながら、他者とコミュニケーションの中で、人とのかかわりを学んでいる」さらに「6年間積み重ねていくことで幅広い表現力を培っている」といった同校のポートフォリオにも認められる表現活動の成果は、こうした問いに多くの示唆を与えているのではないかと。総合的な芸術の素養を求めて

芸術教科に携わる教師の意識の変化についても触れておきたい。'94年にMENCから全米の児童・生徒に向けた芸術教育の基準(通称ナショナル・スタンダード、舞踊・音楽・演劇・美術の各領域のカリキュラムを提示している)が出版されて以来、夏期講習時における教師の意識にも、新しい価値観が生まれている。例えば、自分が担当している芸術教科以外の芸術領域をも学びたいという明確な意識を持つ教師が積極的に他領域の講習会にも参加し始めている。R. エイブラムソン博士の『ダルクローズ・リトミック講座』ではプロのダンサーによる指導も講座に組み込まれるようになった。受講者も、音楽、舞踊、演劇といった多岐に及ぶ専門の教師が受講を希望し、定員を大幅に越えるようになったこともその顕著な傾向の現われであろう。